

【年中行事関係綴】

やまもとひて お
山本秀雄

正月飾り習俗について

手元に「年中行事関係綴」という分厚い綴込が二冊ある。民俗関係のスクラップ帳で、文字通り新聞・雑誌に掲載された年中行事の切抜や聞書・調査メモまで、何でも雑多に綴込んでいる。

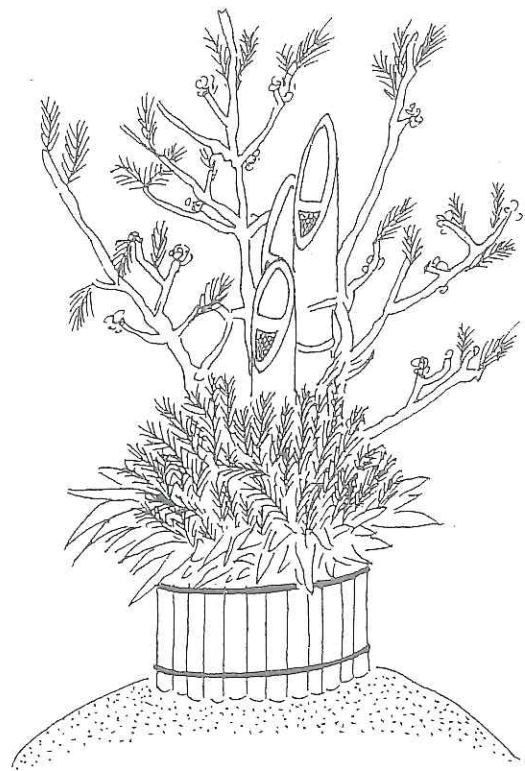
表紙に「年中行事」と名付けるだけに、年間の伝統習俗行事について、起原・由緒など都市・山村を問わず、例えば「神棚の祭り方」・「誕生祝」・「氏神・産土神」・「七夕祭・星祭」など盛沢山の資料集で、どの頁を開いて見ても面白く、それこそ目から鱗を落とすようにも思える。が、残念ながら誰の手によった資料綴かはつきりしない。その中に確かに私が亡父にたのんで種子島の民謡や狩猟習俗、村祭り等での包丁人の役割について下書も綴込まれてあるが、だからと云って父の資料集でないことは確かである。書体が違い調査が全国に亘っていることから、父のなし得るものでないからである。

時代は支那事変以降、主に太平洋戦中のもので、戦後にもかかっているが、不思議と屋久島・種子島に関する色合いはうすいので、戦後に島外からの引揚者か米軍政下に沖縄・奄美地方に渡海の途次、足止めされて種子島に余儀なく滞在された方が残されたものであろうと一人決にそう思い込んでいる。私が復

員して来た時に親戚宅に五人もそんな方々が居られたから。

実は旧年十二月初、長峯の知人から老人クラブで、正月飾の門木や注連縄など作る講習会を開くから、簡単な「説明書」と要請があった。早速この綴込をたよりに「製作要領」を作成したが、その他からも鏡餅の飾り方や慶祝歌の歌詞の問い合わせもあつて、別に二ツ三ツ加えて本誌に紹介させて頂く次第である。それに屋久島の正月行事については、鹿児島大学教授下野敏見先生の屋久島民俗調査書『屋久島正月習俗』（一九六三・二・一）という貴重な文献があることを書き添えて置きたい。尚、注連縄については本文に説明されているが、ここでもふれて置きたいのは、注連縄を張って飾ることは古来これを門戸に、又は神棚・竈・厠・舟・車・井戸等にこれを張り、又神木に引き廻すなど、その起源は古く天の岩戸籠の時に在るといわれている。後代には神前に引き渡して祭り崇める意を表すことになるが、殊に新年の瑞を祝して陽春の氣を迎えるに用いることに重きがあり、外に内外を区画する標の縄として縄を引いて或る地域を占有することにもなっている。しかし、多くの人目を引くのは神事の神聖を保つ表徴とすることが注連縄には最もふさわしいありようといわれる。

その点、屋久島は世界遺産保全のため今、森を神域とし、屋久杉を神木とした再認識の上に島中に縄を張るの覚悟が必要な時ではないか。正月の注連縄に感じたことである。



一 門松

○ 門松は門神・宅神を祭りて、一年中の邪氣・罪穢を祓うという信仰から来たものである。

その年の幸福を願い一家の繁栄を祈ると云うのが本旨である。

清浄な砂を盛り、その砂山から松と竹とかを勢いよく生え出しているように樹てるのである。地方によつては椎・栗・梅あるいは榊など使用する門木に違いもある。

○ 松は千年を契り、竹は萬歳を契るといわれている。何れも常緑の樹や竹であることが愛でられたのである。殊に松は祭り木の意味に通い、竹は其の形を真直な心に通はせた上に、武の心にも通じ武勇を意味するものとして喜ばれたのである。

○ 椎や栗は食料の稔りを表し、梅は霜雪を凌ぎ、馥郁たる香を放つて咲き匂うので一家の繁栄と、迎春の喜びに因んだものである。

○ 榊は栄木であつてこれまた繁栄・目出度しの意を含み、一つには天照大御神の天岩戸にこもりました時、天香具山の五百津眞賢木を根こじに揺り出して使用したという故事により、神代のこと

も偲ばれるという。新年にはふさわしいというところからの事であるという。外の門松には注連縄を懸けるのが普通のならわしになつてゐる。又都合では輪注連といつて注連縄を輪にして飾るようにもなつてゐる。

○ 門松は例年暮れの二十七、八日頃に立て、明けて七日の夕方、乃至は六日夜に入つて取除かれるのである。依つて普通には元旦から七日までの門を「松の内」といつてゐる。地方によつては五日までとするところもある。取除いた門木は七日の夕方、集落ごとに行われる鬼火たきの行事に使用される。

二 (イ) 注連縄の起源
天岩戸開の條に手力雄命が天照大御神のお手を引いてお出し申した。其の時、太玉命が手早く岩戸に繩を引いて、再び此の中には御還りますなどお祈りした。之が尻久米繩であり、注連縄の起源である。

注連縄は元來、神の御鎮座まします境を画し、邪を防ぎ、汚を避るに用いたのであり、従つて悪魔・不浄物等入つてはならないとの標繩となつたものである。但しこの注連縄は現代は神靈の依代として用いられる場合が多い。

(ロ) 齒朶・昆布・橙(代々)

しだは齡を祝ひ・昆布はよろこぶ・橙は代々・などといわれ、いづれも嘉祝の意味をもつものとして附けられるものである。

(ハ) 木炭

木炭は行く末ながく栄える意味である。

三 若水

元朝未明に若水を祝うということも、古來新年行事の一つと

なっている。

宮中でも大晦日に生氣の方(患方)の井戸に蓋をして汲ませない。之を包井と云った。早旦此の井の水を若水桶に汲み上げて、水司が奉り、聖上は朝餉に之をきこしめされて、年中の邪気を払われたと旧記に見えている。

江戸時代に於ては、武家の年男が麻上下で若水を汲み、此の時使用せられる桶を若水桶といつて、暮の内に新調し鶴亀等の目出度い絵を画いて輪飾をかけて使用した。

民間でも此の包井又は患方の泉から、生氣の方に向かつて之を汲み上げ若水を祝ったのである。平日でも朝早く汲んだ水は井華水と云つて邪気を払ひ、腹中を調べ、熱気を下す効能があるとしているくらいであるから、元日早旦の水を若水として尊重すると云うことも強ち故なき事でもあるまい。

要するに水は諸々の不浄を洗い流して清浄潔白にするという力を持つており、且つは雲霧水雪・布瀑・河海と千変万化し、而も常に再びもとの姿に還るといふ所から、いわゆる老いざるもの衰へざるものとの考へより、其の名も若水と称へて、若返りの意と共に活動の源泉を生氣の方より湧き出づる大地の泉によつて求めんとしたものであろう。

かくて若水を飲むは「萬歳不変水急々如律令」と云う呪文を唱えるということになつてゐる。呪文はどこまでも呪文であるに違いないが、知つておく分には何等差し支えはあるまい。

四 屠蘇

現今でも神前に供へて置き新年三日間は毎朝欠かさず用うる習慣となつてゐる。今の様に盛んになつたのは江戸時代からであるといふが、延喜式の典薬式にも出ているので余程古くから用ひられたようである。

屠蘇は白求・防風・●契・蜀椒・桔梗・大黃・烏頭・赤小豆等を調合して作り、三角に縫つた緋縮の袋に入れ、大晦日の夜、亥

五

雑煮

刻(午後十時)桃の枝に垂れて之を井戸に吊し置き、元日寅刻(午前四時)之を取り上げて柳の枝に付け、酒に浸して之を飲むのである。

屠蘇は幼者より之を飲み、順次長者に廻すのであるが、之は少者は歳を得るために賀して之を先にし、老者は歳を失う、故におかれて之を飲むとの意であるらしい。

屠蘇とは鬼気を屠絶し、人魂を蘇生せしむる義といい、或は屠は割で殺を意味し、蘇は鬼の総称である。故に屠蘇とは悪鬼を屠殺するの義なりともいふ。何れにしても邪気を払うということに相違ないのである。

本名を保臈(烹雜)という。雑物混煮の意ともいふ。或は五臓を保養し四百四病を除くの意なりともいふ。現今の如く盛んになつたのは元禄時代からであるが、室町時代の公家年中行事中にこれあるを見れば、これ又年代を怪たる珍品でもある。

雑煮の材料は、各家各地方によつて異なり、多種多様にわたり、又夫々郷土色を發揮している。

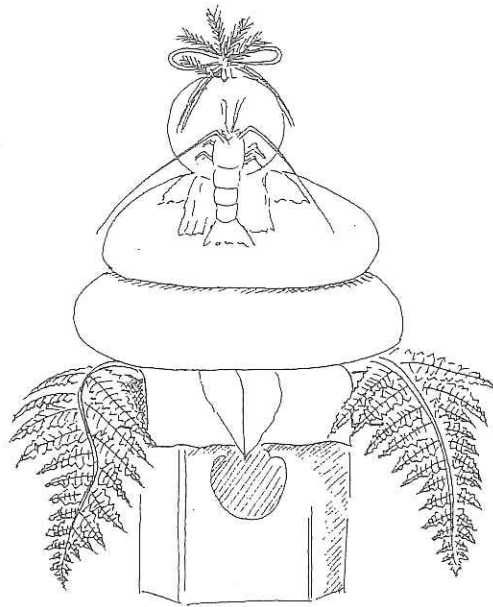
普通一般の例を挙げて見ると大根・人参・牛蒡・芋・結昆布等を交へて羹を作り、それに餅を入れて煮て食べるのであるが、大根は特に正月には涼白と称しすつきりとした清白を愛したものであり、人参は滋味薬用を愛せられ、牛蒡は御宝と通じて目出度きもののひとつであり、芋は多くの子芋のつくところから多子の意を祝せられ、結昆布は睦み喜ぶの意を寓するとせられ、何れも嘉祝づくめの献立である。

餅は何といつても雑煮中の王座を占むる重要品目の一である。垂仁の朝既に餅を用いたとの説もあれば、是また相当古い食べものであるといふことが首肯される。然も餅は望の義で満足(みちなる)の意を有するもので万戸悉く之を祝うのである。

雑煮を祝うには古来太箸を用いる事になつてゐる。新年早著

が折れたでは縁起が悪いという所から、御幣をかつきだしたのでもあるが現代では一般に柳の箸を使用するようである。

足利七代将軍義勝公が嘉吉元年の元旦、雑煮を挟んだ箸が折れたのでこれは不吉であると気にしていたところ、その年の七月廿一日落馬して他界せられたというので雑煮祝には、特に太箸を用いる事になつたとの云い伝えもあるが、しかし忌という字は己の心と書くので、不吉は決して箸そのものではなくして自己の精神一つにあるのである。



江戸町奉行脇坂淡路守安薫が寛政三年元旦、例の箸が折れたので之を二つ折りに折りすて、更に一膳の箸を召しよせ「箸折りてしほん(四品)で食う雑煮かな」と歌つたが、その年の八月従四位下に叙せられたとの話もある。当時幕府では四位を四品といつたのである。

六 鏡餅

此の餅は年内に作り、其の中から特に丸く作り上がったものを鏡餅といつて、神棚・床の間などに飾られたのである。

これも平安朝時代には既に行われた行事の一つである。

後代に齒固(延年)祝の餅と関連し、齒固の時に鏡を見る事が行われるようになってからは、鏡餅と呼ばれる様になり、床の間にも飾られるようになったのである。

鏡餅の飾り方を述べると、先ず三方の四方に、半紙又は奉書一枚づつを垂れ、更に一枚を三方の中に敷き、米を撒し、しだ(裏白)を四方に、其の上に譲葉一枚づつをのせ、其の上に鏡餅を据える。鏡餅の上に橙を載せ、その橙に小根松を挿す。根松には水引を蝶結びにしたるものを附ける。そして正面に穂俵(海藻)を下げ、その上に海老を立てかけるようにおく。別に昆布(広目)と熨斗(乾燥アワビ・スルメ)昔はそれらを適宜の短冊に切り、五枚重ねにして端を糸でしばり、開いて扇のようにして橙の左右に挟む。鏡餅の周囲には勝栗。串柿などを適宜におく。

上は図で示したもの。

以上一通り飾り方を述べたが、各家庭や地方で違い附加・減少した伝統の仕来り郷土色のあるは当然である。

此の鏡餅は正月十一日に始末される。それを鏡開きといふのである。

鏡開きといふのは元来武家から出た言葉であつて、切るという言葉をも忌み開くと云つたのである。

序に鏡餅に用いる品物の解説を試みてみると、

1、米 鏡餅に撒らす米は、およねとよび、よねは世の根である。

生命の根源であり、百穀の王であると共に長寿を附与する効能

随一の所有主である。

2、齒朶 したは裏白・穂長・諸向ともいわれ、齒は齡に通じて壽命長久の意あり、裏白は潔白を意味し、諸向は夫婦の相生を祝ひ、穂長はその形朶の長く瑞鳥鳳凰の尾に擬るのである。

3、交譲葉 一名親子草といひ、その名の如く代々譲つて子孫の八十続永久に立ち栄ゆるという祥草である。(ゆづるは、交譲木)

4、昆布 和名を「ヒロメ」といひ、広布に作りて末広々に繁栄す

るを、よろこんぶのである。

5、海老 正月には伊勢海老が尊重される。威勢海老に通じ、赤色を尚び、老の字にあやかる。要するに海老の如く鬚長くのびて腰のかがむまで長命なれよと願う心からである。

6、橙 代々子々孫々相続いて絶ゆることなく、立ち栄えますようにとの意味がめでたいのである。

7、柚子 柚の実なり。柚を悠々に通わせ、悠々と喜ぶという意で正月の慶びに用いられている。

8、橘 別に柑子ともよばれ、今は柑子蜜柑の称で好事、幸事に通わせてこのましいこと。幸ことのあるようにと願って正月の祝儀に用いられたのである。

9、串柿 萬物をかき集め、また嘉来の音に通ずる所から目出度しとされたのである。

10、搗栗 また勝栗に作り、之を「勝栗」に通わせて慶いものとしている。古武士の出陣の時には、搗栗・熨斗・昆布を三肴と称し、首途の祝として重要せられたのである。此の意味合いから正月の祝物として使用して来たのである。

11、穂俵 神馬藻とも馬尾藻ともいい、長さ三四尺程の海草で実がよく米俵に似ているところから此の名がある。また穂といふ俵といふも何れも目出度いところから用いられている。

12、熨斗 祝儀には欠くべからざるもの一つである。既に延喜の頃から使用されている。之は熨斗鯉という。鮑貝の肉を薄く長く刺いで篠に引きのばしたものであるが、現今では之に代る種々なもの作られるので、余程重要な儀式でない限り用いられないようになつた。しかし手伸・楽しに通じて目出度いばかりでなく、鯉は古来不老長寿の妙薬として信ぜられていたので嘉祝用として尊重されたのである。

13、梅干し 皺のあるのを老人に比し、老人になつて皺のよるまで、長命であるようにと願う意味より用いられている。

14、鯛 昔から祝儀には欠くべからざる魚である。めでたいという名に通わしたのである。

15、酒 酒は榮の約まつたもので、之を用うれば笑み榮え楽しむものとして古来慶事には欠くべからざるものとなつている。酒は又さきという。少量を用いよの意を含めて鯨飲を戒むる意、自から存するもの如く思はれる。

16、田作 別にごまめともいう。ごまめは御丈夫にあやかつたのである。古くは田畑の肥料としては第一のものであつたので、豊年を祝うの意に用い、而も年頭に当たつて農家の苦勞を知らしむるために各階層広く用いられたものと伝えられている。

17、数の子 和名「カド」即ち鯨の子である。之は数の多い子孫繁昌の意に通わせ正月の慶祝に用いたのである。

屋久島産本格焼酎

島外発送うけたまわります

ご注文は郵便振替で

和洋酒/米穀/食料品

新田商店

☎09974-6-2501

◎価格は梱包代・送料共で右の通りです。

	1.8ℓ 2本 カートン入	1.8ℓ 3本 カートン入	1.8ℓ 6本 P 箱 入
鹿児島県内	3,710円	5,090円	8,920円
九州・中国	3,810円	5,190円	9,120円
四国・関西	3,910円	5,290円	9,230円
中部・北陸	4,020円	5,400円	9,330円
関東・信越	4,220円	5,600円	9,540円
東 北	4,430円	5,810円	9,740円
北 海 道	4,740円	6,120円	10,050円

郵便振替口座番号▶鹿児島2-23300
加入者名▶新田三喜雄
住所▶〒891-43 鹿児島県熊毛郡屋久町安房105